

	<ul style="list-style-type: none"> 元々は朗らかで細かいことは気にしない性格だが、娘との電話の中で、最近忘れっぽくなってきたことや、仕事でミスを繰り返してしまったことを気にしている様子があった。
現病歴・既往歴	今までに大きな病気をしたことがない。
事例として想定される関わり	<p>○ 仕事でのミスが目立つようになり、心配した職場の上司から産業医への相談を提案される。産業医面接にて、1度病院を受診してみるよう勧められる。今までに大きな病気をしたことがなく、かかりつけ医がなかったため、産業医から示された病院のうちから認知症専門医である脳神経内科を選ぶ。</p> <p>→ 1人で受診する勇気がなかなか出ず、娘の夫の休みが取れたタイミングで娘に付き添ってもらって受診。認知症専門医から若年性のアルツハイマー型認知症と診断される。</p> <p>本人・娘共に信じたくない気持ちがあったが、認知症専門医から本人の居住区の認知症地域支援推進員に相談してみるよう勧められ、地域連携室の社会福祉士が認知症地域支援推進員との面談日の調整を行う。</p> <p>○ 初回面談後、認知症地域支援推進員が自宅に訪問し、時間をかけて今の気持ちや、「できる限り仕事は続けたい」などの今後の生活についての思いを聞き取る。病院受診日から出勤できていなかったことから、一度産業医と上司と面談できるよう認知症地域支援推進員から会社に連絡した。</p> <p>→ 本人・娘・産業医・上司・認知症地域支援推進員で面談を行い、本人の思いや今後の対応について共有。以下のことが決まる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 当面は同じ会社の業務負担が少ない別の部署で働くこと。 その部署でも働くことが難しくなった場合は、かかりつけ医の診察のもとで休職し、傷病手当金の手続きをすること。 休職後、状態改善が難しいようであれば、障害年金支給の見込みが立った時点で退職すること。 <p>○ また、娘の様子を気にした認知症地域支援推進員から、娘の居住区の区役所地域支えあい課の地区担当保健師に連絡。元々双子の子育て中ということで気にかけていたが、訪問や電話などでの様子確認を増やしていくということと、本人と家族の同意のもとで、随時関係者で情報共有をすることを確認した。</p> <p>● 今後</p> <ul style="list-style-type: none"> 傷病手当金や精神障害者保健福祉手帳（初診日から6か月後以降）、障害年金（初診日から1年6か月後以降）等の手続きは、認知症地域支援推進員が娘にも連絡をとりながら、本人に付き添って実施する。 可能な範囲で本人のサポートができるよう、娘家族が本人の自宅の近くに引っ越し。区の地区担当保健師間で引き継ぎを行う。

	<ul style="list-style-type: none">・ 退職後は自宅から通える場所にある就労継続支援B型事業所に行くこととし、障害者基幹相談支援センターにも相談しながら調整する。・ 自宅での家事が難しくなった段階で、地域包括支援センターや居宅介護支援事業所(ケアマネジャー)に相談し、要介護認定の申請を行う。その後、介護保険で訪問介護サービスを利用。また、将来の生活の場として、グループホーム等の見学も始める。・ 若年性認知症の人、家族等の集いの場への参加を促す。
--	--